

音楽科授業案

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 真人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026746

音楽科授業案

授業者 小林 真人

- 1 日時 平成30年10月12日(金) 第2時 11:20~12:10
2 学級 2年D組 (音楽室)
3 題材名 ミュージカル『ジキル&ハイド』より「嘘の仮面」
—音楽と芝居の融合した歌唱表現に挑戦しよう!—

4 題材の目標

歌詞で表現されている感情の変化を、声色の変化を伴わせていきいきと歌唱表現することに課題の残る子どもたちが、「感情やイメージによって変化する声の音色」「ミュージカルならではの発声による声の音色」「歌い手の表現によって音程やリズムの変化する旋律」やそれらの関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながらミュージカルらしい歌唱表現を追求していくことを通して、ミュージカルならではの音楽表現のよさや美しさを味わい、ミュージカルにおける音楽表現や音楽文化に対する価値観を豊かにする。

5 題材観

(1) 感情を表現すること

私たち人間は、日常生活の中で、言葉を一本調子で発することは滅多にありません。なぜならば、自分の感情を表現するために、声色や表情を変化させたり、身振り手振りをつけたりするからです。無意識のうちに行ってしまうこれらの行為は、人間が自分の感情を表出したり、他者と共感し合いながら豊かに生活したりするための本能的で自然な表現手段であると言えるでしょう。「歌うこと」「演じること」「踊ること」は、この延長にある行為です。声色や表情を変化させたり、身振り手振りをつけたりするだけでは表現し切れないものを表出したいというエネルギーが加わって、「歌」も「演技」も「踊り」も生まれていったのでしょう。

感情を表出したり、共感し合ったりするための本能的で自然な表現手段の延長であるという根本を同じくする「歌」「演技」「踊り」は、人々の営みという歴史の中で、神々や精霊を崇めたり、その技巧で観衆を沸かせたり、その行為自体の美しさを追求したりするといった他の目的でも行われるようになっていきました。また、根本を同じくするがゆえに密接にかかわりあっており、互いに結びつくことで相乗効果をあげ、とても強い感情エネルギーを表出させたり、豊かな表現を生み出したりすることができるようになっていきました。



ミュージカルも、豊かな感情表現を追い求めていった先に生まれていったのでしょう。「歌」「演技」「踊り」を融合させて登場人物の感情をいきいきと

表現する舞台俳優——。「歌」「演技」「踊り」の融合による圧巻のパフォーマンスで表現される登場人物の感情に思わず心が動かされ、魅せられていく観衆——。ミュージカルは、感情を全身で思い切り表現したいという人間の欲求が舞台芸術という形に昇華されたものであり、「歌」「演技」「踊り」の融合が織りなす深奥なる感情表現を味わうことのできる極上のエンターテインメントであると言えるのかもしれません。

(2) ミュージカルって、そもそも何?

①ミュージカルの定義

形容詞であるはずなのに名詞扱いされている「ミュージカル」は、「ミュージカル・シアター」の略語で、「ミュージカル・コメディ」「ミュージカル・プレイ」「ミュージカル・レビュー」の総称です。実のところ、ミュージカルには定義は特にないのですが、「ミュージカルとは、そもそも何か?」と聞かれたら、「音楽と芝居の融合によって生まれた、誰にでも楽しめる演劇である」と答えることができるでしょう。台詞や演技などといった芝居の要素に、歌や曲、そしてダンスといった要素が加えられて表現方法が無限に広がった演劇であるミュージカルでは、それらすべての要素が一体となって物語を紡いでいきます。

②ミュージカルの成り立ち

ミュージカルは、誰かの手によって発明されたものでもなければ、一朝一夕に成立したものでもありません。18世紀のロンドンで世界初のミュージカルが誕生するまでも、人々の様々な営みがありました。また、時代の変化とともに発展を遂げてきた

ミュージカルは、それぞれの時代で次々と名作を世に送り出し、今なお進化を続けています。

音楽と芝居の融合した舞台芸術は、紀元前5世紀のギリシアに既に存在していました。そして、16世紀末になると、イタリアの芸術都市フィレンツェの貴族が、芸術家や学者らを集めて、古代ギリシアの演劇を復興しようという運動を巻き起こしました。その運動の中で、彼らが「古代のギリシア悲劇ではおそらく台詞を歌い、その間に心理状態や状況を説明する合唱が入ったのだろう」と考えたことで、「歌う演劇」としてのオペラが誕生しました。



17世紀になると、オペラの合間に演じられていた喜劇中心の音楽劇が、のちにオペレッタとして独立しました。ミュージカルは、そのオペレッタにエンターテインメント性を加えて、ニューヨークのブロードウェイを中心に発展してきたものであると言えるでしょう。

しかし、「オペラ（歌劇）→オペレッタ（喜歌劇・軽歌劇）→ミュージカル」とする流れも、系譜のごく一部に過ぎません。ミュージカルは、ヨーロッパとアメリカで育ったいくつもの先行芸能の諸要素を取り入れ、大西洋を往還しながら影響を及ぼし合って、徐々にジャンルとして確立されていきました。それ故に、明確な定義は存在せず、「形式にしばられずに、何でもあり！」な表現をとっている舞台芸術であるとも言えるでしょう。

③オペラとミュージカルの違い

オペラもミュージカルも、表現者と観衆が同じ時間と空間を共有しつつ、その場で作品の実体が生み出されていく形態をとっているため、舞台芸術に位置づけられ、歌を中心にして音楽で物語が進められていきます。また、音楽の他に、演劇、舞踊、文学、美術などの要素も関わるので、総合芸術と呼ばれています。では、オペラとミュージカルの違いは一体何でしょうか。

オペラとミュージカルの違いとして、歌わずして台詞を発している場面の有無を思い浮かべる人もいます。オペラでは、叙情的な独唱であるアリアがあったり、しゃべるように歌われるレチタティーヴォがあったりするように、歌われ方は様々ではあるものの、台詞が全て歌になっています。一方、ミュージカルでは歌わずして台詞を発している場面が登場することがあります。しかし、このことが

オペラとミュージカルの違いであるというわけではありません。

オペラとミュージカルの決定的な違いは、音楽にあります。様式美を追求していったオペラでは、登場する音楽はクラシック音楽だけです。一方、ミュージカルは、クラシック調やロック調、ポップス調など、様々なジャンルの音楽が登場し、音楽においても「何でもあり」となっています。そのため、オペラ歌手がマイクを使用せずに歌声を響かせているのに対して、ミュージカルではオペラで用いられない発声で歌われることの方が圧倒的に多く、マイクも使用します。また、オペラでは歌い手は「歌」だけ、「踊り」はダンサーという分業制になっていますが、ミュージカルの役者は「歌」も「演技」も「踊り」もこなします。



(3) ミュージカルらしく歌うこと

オペラとミュージカルで歌い方が異なっていることからわかるように、同じ「歌う」という行為であったとしても、曲の種類や地域、言語などによって、歌い方は異なります。では、ミュージカルナンバーをミュージカルらしく表現するには、どのように歌えばよいのでしょうか。

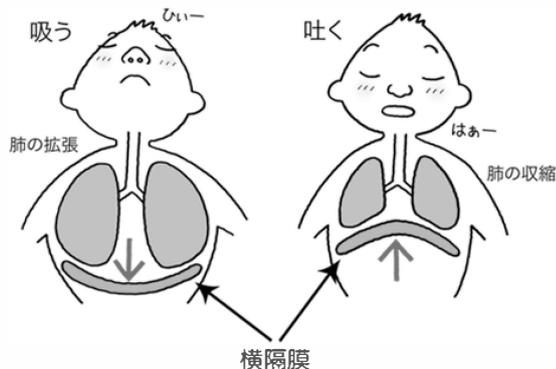
①怒鳴ることのできる身体の使い方で歌うこと

怒鳴る声は、楽に遠くへ響かせることのできる声です。私たちは怒鳴るとき、横隔膜を下げることで大量の息を確保し、その息をすばやく、鋭く流しています。横隔膜が下がっている状態は、息の流れに圧力をかけることができる、すなわち息を吐き続けることができるため、声を息の上に乗せるための支えとなります。このような身体の使い方は、オペラを始めとして、様々な歌や演劇でも用いられており、もちろんミュージカルにおいても大変重要です。

横隔膜とは、胸腔と腹腔との境にある、弓のような形の筋肉性の膜のことです。肺にたくさんの空気が入ることで肺が拡張し、横隔膜が下がりますが、この呼吸を横隔膜呼吸と言います。横隔膜呼吸では、肺の中の空気を吐き切ると、自然と肺の中に新たな空気が入ってくるため、とても効率的で余計な労力を必要としない呼吸であると言えます。

横隔膜呼吸は、眠っているときに無意識に行っているため、眠っている人のお腹の動きを見ると、その仕組みについてのイメージが湧いてきます。眠っている人のお腹は、息を吸い込む際に徐々に膨らみ、吐き出す際に徐々にへこんでいきます。この現象は、息を吸い込むことで肺が拡張し、肺に押し出される形で横隔膜が下がるのと連動してお腹が膨らんでいき、息を吐き出すことで肺が縮小して横隔膜が上がっていき、それと連動してお腹の膨らみがもとに戻っていくことによるのです。

「わー——」と怒鳴ることは、横隔膜呼吸を用いて発声することと同じことです。怒鳴ることのできる身体の使い方を意識して歌うことで、横隔膜呼吸と発声がつながり、声帯で鳴った音声は息の流れの上に乗せられるようになり、声を楽に遠くへ響かせることができるようになるのです。



②しゃべるように歌うこと

英語やイタリア語を話すネイティブスピーカーは、「しゃべる」発声そのものが横隔膜呼吸になっていることが多いです。そのため、彼らは「しゃべること」と「歌うこと」の境界線をあまり意識していないように思います。

それに対して日本人は、横隔膜呼吸を用いて「しゃべること」を日常的にしない人や、発音を明瞭にして「しゃべること」への意識の低い人も少なくありません。なぜならば、日本語が極少量の息でも言葉を発することが可能であり、なおかつ舌をあまり動かさなくても相手に通じてしまう言語であるからです。そのため、日本人は「しゃべること」と「歌うこと」が別物であるという認識に陥ってしまったり、歌う際に言葉が伝わりにくくなってしまうたりするのです。

ミュージカルは上演される国の言語で歌われますが、日本語のこの特性は、ミュージカルならではの「音楽と芝居の融合した表現」において、弱点となります。「歌は語るように、台詞は歌うように」というのはよく言われる金言ですが、日本語を話す私たちにとって「語るように歌う」というのは、感情的な表現においては金言であっても、物理的な発声動作においては迷言となってしまうのです。

「しゃべること」と「歌うこと」が別物であるという認識を改革するためには、横隔膜呼吸を意識しながら、旋律はつけずに言葉を引き立てて歌詞を「しゃべること」から始めることが有効でしょう。そして、横隔膜呼吸と言葉を引き立てることへの意識をキープしたまま「しゃべること」と「歌うこと」を交互に繰り返したりすることで、「歌は語るように、台詞は歌うように」を体得していくことができるでしょう。

「しゃべり」なのか「歌」なのかの区別がつかないような表現は、日本語で上演されているミュージカルでもよく見られます。「しゃべること」と「歌うこと」が別物であるという認識を払拭できていない人がこういった表現をするときには、どこかわざとらしさや不自然さが残ります。しかし、その表現からわざとらしさや不自然さを感じさせない舞台俳優の技量から学ぶことは多く、表現を聴いて真似ようとしてみることも、ミュージカルらしく歌うための近道であるでしょう。

③表現したい感情やイメージを表現できる声で歌うこと

「正しい発声とは何か」と言われると、「かれない声」「通る声」「響く声」などを思い浮かべる人もいます。もちろん、声帯への負荷については懸念すべきことではあるから、そのような声は間違いなく多くの人にとって理想の発声であると言えるでしょう。しかし、そのときに表現したい感情やイメージに「喉がれにつながりうる声」が合うのであれば、その声は正しい発声になり得ますし、「通る声」や「響く声」が不自然だと感じられるのだとしたら、その状況においては正しい発声であるとは言えないでしょう。

ミュージカルらしく歌ううえでは、「このような声で歌わなければならない」という考えを取り払うことが大切でしょう。地声も、裏返った声も、鼻にかかった声も、表現したい感情やイメージに合っているのならば、どんどん活用すればよいのです。

表現したい感情やイメージについて思いを膨らませることは、それを表現するうえで「どのような声色が、その場面でふさわしいのか」「どのような声色で歌うことが、最も聴き手に共感を得られるのか」について考えることでもあります。声色は感情やシチュエーションで変わります。そのため、同じ歌詞であっても、「悔やんでいるのか」「諦めているのか」で、声色は異なります。物語の内容を理解し、登場人物の気持ちや人物像に思いを馳せ、自分が表現したい感情やイメージについて思いを膨らませて、それらを表現することのできる声を追求しながら歌っていくことが、ミュージカルナンバーを歌うことの神髄であるでしょう。

④楽譜に捕らわれずに歌うこと

ミュージカルナンバーを歌いたいと思って楽譜を入手し、楽譜通りに歌うと、「何だかミュージカルっぽくない!」と思ったことがある人もいますでしょう。より美しい表現を実現するうえで他者との調和が大切となってくる音楽を奏でたり、作曲者の思いや意図を読み取って楽曲に対する解釈を深めたりすることにおいては、楽譜通りに演奏することは大変重要になってきます。しかし、ミュージカルにおいては、表現は演じる者に委ねられています。もちろん、舞台監督の意向を汲む部分もあるでしょうが、少なくとも決められた音程やリズムといった枠の中に収まるのではなく、「自分が何を表現したくて、そのためにどのように演じたいか」「どのように個性を出すのか」こそが、ミュージカルの歌い手に求められていることなのでしょう。

演じることは、格好つけることでもあります。楽譜に捕らわれずに、「こんな風に表現したい!」という思いに身を任せて音程やリズムを変え、格好つけて歌ってこそ、ミュージカルであると言えるでしょう。

⑤表情や動きをつけて歌うこと

ミュージカルでは、舞台俳優が無表情かつ直立不動で歌うことはありません。それは、登場人物の感情を表現し、その感情を他の登場人物や観衆に伝えたいという意志をもって歌っているからです。そのため、歌で感情を表現する際に表情が変化したり、身振り手振りがついたりするのは、言わば自然なことなのです。

舞台俳優は、「歌詞で言っていることを、表情で表現するとしたらどうなるのか」「歌詞で言っていることを、身体で表現するとしたらどうなるのか」について考えるはずです。そして、「音を身体でどのように捉えて表現するのか」についても、同様に考えるはずです。音楽と芝居の融合に心から入り込むことができれば、表情や動きをつけて歌いたくなってしまおうでしょう。

(4) ミュージカル『ジキル&ハイド』について



本題材で子どもたちは、ミュージカル『ジキル&ハイド』の中に登場する「嘘の仮面」という楽曲を歌います。

ミュージカル『ジキル&ハイド』は、ロバート・ルイス・ステューヴンソン（1850～1894、イギリス）の小説『ジキル博士とハイド氏』を原作とした、ブロードウェイミュージカルです。作詞・脚本担当のレスリー・ブリカッス（1931～、イギリス）と作曲担当のフラ

ンク・ワイルドホーン（1958～、アメリカ）の手によってミュージカル化されました。1990年にアメリカのヒューストンで上演された後、1997年にブロードウェイに進出して大ヒットを記録し、日本では2001年以降上演されるようになり、2007年までの公演では鹿賀丈史が、2012年以降の公演では石丸幹二が主演を務めています。

①物語の内容と作品のテーマについて

ミュージカル『ジキル&ハイド』では、原作には登場しないジキルの婚約者エマ・カルーや、ジキルを慕う娼婦ルーシー・ハリスなどといったオリジナルキャラクターが加えられています。ミュージカル版のあらすじは次の通りです。

1888年秋、ロンドン。医師のヘンリー・ジキルは、長年、「人間の善と悪を分離する薬」の研究に身を捧げてきた。それは精神を病み心をコントロールできなくなった父親のため、ひいては科学の発展と人類の幸せにつながるという強い信念につき動かされてのことである。しかし、婚約者エマの父であり病院の理事の一人であるダンヴァース卿や親友のアターソンからは、その研究は神を冒とくする危険な理論だと忠告される。また、研究の最終段階である薬の人体実験の許可を得るため、ジキルは病院の最高理事会に臨むが、理事会のメンバーである上流階級の面々によって、要求は却下されてしまう。

その夜、ダンヴァース卿邸では、ジキルとエマの婚約パーティーが開かれた。この婚約をよく思っていない理事の一人ストライドは、エマに結婚を考え直すよう迫るが、エマとジキルは強い絆で結ばれていた。

上流階級の社交にへき易としたジキルは、アターソンとパーティーを抜け出し、訪れた娼館で妖しい魅力をもつ娼婦ルーシーと出会う。ルーシーとの会話の中で、ジキルは「薬を自分で試す」という解決策を見だして帰宅し、心を決め自宅の研究室で自ら開発した薬を服用する。ほどなくして身体に異変が起こり……。「自由だ!」——ジキルから変身を遂げたエドワード・ハイドはそう叫ぶと、ロンドンの闇の中へと消えていくのだった。

それから一週間。部屋に閉じこもり誰にも会おうとしないジキルの元をルーシーが訪ねて来る。傷だらけの彼女の背中を治療するジキルに、ルーシーが語った加害者の名前はエドワード・ハイド。ジキルは、自分が凶悪な分身を生み出したことに慄然とする。そして起こる連続殺人。理事会のメンバーが惨殺されていく事件現場にはハイドの姿があった。時が経つにつれて、ジキルはハイドを制御できなくなっていくのを感じていた——。

薬によって、ハイドという別人格がジキルから引き出されることで、物語はスリリングな展開となっていくのですが、「ジキル=善」「ハイド=悪」ではなく、あくまでもヘンリー・ジキルという一人の人間の中にもともとあった二面性が薬によって分離し、新しいハイドという人格が生まれたという点がこの作品の本質をついていると言えるでしょう。「ジキル&ハイド」では、物語の様々な場面で「本音を隠し、仮面をかぶって生きる人々の心の内」「人間に隠された欲望」「すべての人間がもつ善と悪、その狭間での苦悩」などといった人間の心の奥底が、ぴたりと連動した音楽と芝居によってえぐり出されていきます。そして、おそらく観衆の中には、良心をもつがゆえに怯え縮こまっているハイドよりも、思うがままふるまうジキルの方が、連続殺人を犯すにも関わらず魅力的であると感じる人もいるでしょう。

「善」とは何か、「悪」とは何か、この世に存在する「美しいもの」「貴いもの」「汚らわしいもの」「残酷なもの」とは何か……。心に迫る普遍性のあるテーマをもつこの作品は、どの年代の人に対しても、見るたびに新たな発見を与えてくれるのです。

②「嘘の仮面」について



「嘘の仮面」は、物語が幕を開けてから比較的すぐに登場するアンサンブルナンバーです。アンサンブルナンバーとは、アンサンブルキャストによって歌われる楽曲のことを言います。役名のない登場人物であったり、場面によって役が変わったりするアンサンブルキャストは、大勢で歌い踊ったり、場面や背景に調和したりする存在とも言えます。歌詞は次の通りで、人間の二面性が歌われています。

A メ ロ	男A 男B 男A・B	人前では お付き合いの 仮面被る それがたてまえ 本音は すべて嘘さ
A メ ロ	男C 男D 男C・D	夜になれば 素顔見せる 恐怖の裏 隠している 真実 ただの嘘さ
B メ ロ	全員 男E	毎日 外面気にして 嘘で固める そう 偽り 束の間の
B メ ロ	全員 男F	ゲーム それは 仮面舞踏会 聖者の振りして おどけてる

A メ ロ	男F 全員	ほんとうのこと ただ一つさ この病気は 治りゃしない この世は 辛い日々さ それも嘘さ
C メ ロ	女たち 女A	外面ばかりを 見ているだけでは 真実は見えてこない 裏の顔は表に出さない 人は 裏切るものだわ
D メ ロ	全員 男G	よこしまな秘密とは？ そう嘘がほんとか？ 人は誰も持つさ裏表を
C メ ロ	全員	会う人誰も あんたも あんたも 世の中すべてが嘘つき 優しい顔して 世間と向き合う 悪い噂も気にかかる
D メ ロ	全員 女たち 男たち	目の前のお前たち 認めやしないさ 聖人の偽善者ぶり 嘘さ 嘘さ
A メ ロ	男H 男I 全員	牧師なのに人を殺し 教師なのに人だまして いいか そう 嘘の仮面
A メ ロ	男J 男K 男L 全員	金を稼ぐ金持ちども 稼ぐ以上に 使う女 それもゲーム 暴け！ 嘘を
B メ ロ	全員 男M	善良にみえてはいるが 根は悪い奴 生まれつき その通り
B メ ロ	全員 男N	誰も知ってることを 知らない素振り グルなのさ
A メ ロ	全員 男O 全員	日が暮れば 一人になり 素顔見せる 誰もそうさ 見てみろ！ 嘘の仮面
A メ ロ	全員 男P 男Q 全員 男R 男S 全員	人はふたつ そうさ善悪 良い行い 邪魔されるぞ！ 悪夢は 終わりがいい 嘘の仮面 だまされるな 表向きで 裏があるぞ すべて仮面

【日本語詞】 高平哲郎

「嘘の仮面」は、物語の中で幾度かその旋律が再登場するだけあって、作品の本質を匂わせるものとなっています。また、楽曲自体も同じ旋律が何度も

繰り返されるため耳に残りやすく、様々なキャストが個性を出しながら歌い交わし、歌い合わせていく迫力あるナンバーであるため、オープニングから観衆の脳裏に強烈な印象を刻みこみます。

③なぜ『ジキル&ハイド』より「嘘の仮面」なのか ア 作品や楽曲のテーマという視点から

ミュージカル作品には、物語性やテーマがありますが、それらは作品によって様々です。作品によっては、中学生という発達段階を考えると、「子どもだました」「きれいごとだ」などと捉えてしまったり、共感できなかつたり、物語の内容や作品のテーマが「子どもっぽ過ぎる」「自分とはかけ離れている」などと感じられて、表現することに対して意欲的になれなかつたりする子どもが出てくることも考えられます。

人間の二面性や、「善」とは何か、「悪」とは何かというような、哲学的で普遍性のある内容を軸にして物語が描かれていく『ジキル&ハイド』の場合は、物語の内容やテーマが多くの中学生にとって心に迫ってくるものがあり、実体験と重ね合わせて思いを馳せていくことのできるものだと思います。また、人間の二面性を嘲笑的に非難した「嘘の仮面」の歌詞は、中学生にとっては興味深いと思えるものだと考えられ、「人間の本質についていておもしろい」「確かに人付き合いでは建て前だけだ」などと、共感的に捉える子どもも多いでしょう。その一方で、ある意味「人間は救いようのない生き物だ」とも思ってしまう物語の内容や歌詞から、落胆を覚えたり、目を背けたくなくなったりしてしまう子どもも出てくるかもしれません。しかし、「善」と「悪」を分離しようとしたがゆえに、「悪」を制御できなくなってしまうという物語の内容をふまえると、物語で描かれる「すべての人間がもつ善と悪、その狭間での苦悩」や、「嘘の仮面」で歌われている「終わりのない悪夢」のようなものを乗り越えた先にこそ、人間としての強さや気高さを信じ生きていくことの価値を見いだすことができるのではないのでしょうか。

以上のことから、『ジキル&ハイド』そして「嘘の仮面」は、ぜひ中学生に出会ってほしい作品であり、作品のテーマから中学生も何かしらの「人生において価値あること」を感じ取ってしまう作品であると考えました。

イ 音楽的な視点から

「嘘の仮面」は、4パターンの旋律が交互に繰り返されることで楽曲ができています。また、歌い手全員で歌う箇所や複数人で歌う箇所は基本的にユニゾンとなっています。さらに、大部分が中学生にとって無理なく歌える音域であり、無理がありそう

な箇所についても、旋律をアレンジすることで対処することが可能であると考えられます。そのため、「旋律をとりあえず歌うこと」についての技術的なハードルは、そこまで高くはないでしょう。

また、多くのアンサンブルキャストに独唱が用意されたアンサンブルナンバーであるため、一人一人が自分の表現したい感情やイメージについて思いを膨らませて、それらを表現することのできる声で歌うことを追求でき、見合ったり聴き合ったりすることで、仲間と歌唱表現を磨き合うことができます。また、全員で歌い合わせる歌唱はもちろん、歌いつないでいく部分も多いため、仲間と共に音楽をつくり上げる喜びも味わうことができるでしょう。

以上のことから、『ジキル&ハイド』より「嘘の仮面」は、子どもたちにとってミュージカルらしく歌う活動に取り組みやすく、なおかつミュージカルらしく歌うことについて仲間と共に深めていくことのできる楽曲であると考えました。

(5) 本題材で味わう音楽科ならではの文化

本題材において子どもたちに味わってほしい音楽科ならではの文化を、「ミュージカルらしい歌唱表現を追求すること」としました。

ミュージカルらしく歌うために、子どもたちは舞台俳優の歌う映像や音源を参考にしましょう。音楽に対する感性を豊かに働かせながら視聴することで、ミュージカルならではの音楽表現を味わい、「感情やイメージによって変化する声の音色」「ミュージカルならではの発声による声の音色」「歌い手の表現によって音程やリズムの変化する旋律」やそれらが関連し合うことを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じていくことでしょう。

また、子どもたちは、ミュージカルらしく歌うために、「感情やイメージによって変化する声の音色」「ミュージカルならではの発声による声の音色」「歌い手の表現によって音程やリズムの変化する旋律」といった「音楽を形づくっている要素」に関する視点を持ち、音楽に対する感性を豊かに働かせながら歌唱表現を創意工夫していくことでしょう。そこでは、作品のテーマや歌詞の内容に立ち返って表現したい感情やイメージについて思いを膨らませたり、仲間と互いの歌唱表現を聴き合って「表現したい歌唱表現ができているか」についてアドバイスし合ったりする子どもたちの姿が見られるでしょう。

(6) 題材と子どもたち

本校の2年生の子どもたちは、昨年度、シューベルト作曲の歌曲を通して、声色の変化による歌唱表現のよさや美しさを味わいました。子どもたちは、

鑑賞した「魔王」を大変気に入って、「ます」の歌唱にも意欲的に取り組みました。しかし、「ます」の歌唱においては、「歌詞で表現されている感情の変化を、声色の変化を伴わせていきいきと歌唱表現すること」を十分に実現することのできた子どもばかりではなく、授業者は次の二つの課題を見いだしました。

- ①歌詞で表現されている感情の変化についてイメージを十分に膨らませ、自分自身の声で声色を様々に変化させながら表現することのおもしろさを感じ取ること
- ②「他者の歌声と調和させることのできる歌声で歌唱すること」や「音程をはずさずに正確に歌いたい」ということばかりを意識するのではなく、表現することに大胆になって、いきいきと歌唱表現すること

本題材で音楽と芝居の融合した「ミュージカルらしい歌唱表現」に挑戦していく子どもたちは、①と②の課題と向き合っていくことでしょう。子どもたちは、「感情やイメージによって変化する声の音色」をいかして、ミュージカル『ジキル&ハイド』の物語の世界観や「嘘の仮面」の歌詞の内容にふさわしい歌唱表現を創意工夫していこうとするでしょう。また、「ミュージカルならではの発声による声の音色」や「歌い手の表現によって音程やリズムの変化

する旋律」を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ることによって、「歌はこのように歌うのが正しい」といった認識を一旦取り払い、変に発声や音程、リズムに捕らわれずに個性を出して歌うことも大切であると気づいていくでしょう。授業者は、子どもたちの思いや気づきが実際の歌唱表現に結びつくように、発声についての指導をしたり、旋律のアレンジの仕方を提案したりするといった支援をしていき、音楽と芝居の融合を体感しながらのびのびと歌唱表現をする子どもたちの姿を期待したいと思います。

ミュージカルならではの歌唱における豊かな感情表現への挑戦は、子どもたちの歌唱表現に向かうエネルギーを増幅していくことでしょう。また、音楽の授業で取り組むことの多い合唱とは異なる歌唱表現にふれることは、子どもたちの音楽に対する見方や考え方を広げていく機会となるはずです。

音楽に対する感性を豊かに働かせながら「ミュージカルらしい歌唱表現を追求する」ことは、音や音楽のよさや美しさに感動を覚え、音や音楽の多様性や固有性に気づいていくことにもつながるでしょう。子どもたちにとって本題材が、仲間と共にミュージカルならではのよさや美しさを味わい、分かち合う機会となることを、そして、「進んで様々な音や音楽のよさや美しさを味わい、分かち合う人」になっていくきっかけとなることを願っています。

参考文献：東宝／ホリプロ(2018)『MUSICAL JEKYLL & HYDE』 東宝／ホリプロ
 小山内伸(2016)『ミュージカル史』 中央公論新社
 塩田朋弘(2009)『知識ゼロからのミュージカル入門』 幻冬舎
 鴻上尚史(2012)『発声と身体のレッスン 魅力的な「こえ」と「からだ」を創るために 増補新版』 白水社
 参考資料：VOITORE MATCH For Musical&Opera <https://voitorematch.com/>

6 新学習指導要領との関連

A 表現

- (1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるように指導する。
 - ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫すること。
 - イ 次の(ア)及び(イ)について理解すること。
 - (ア) 曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わり
 - (イ) 声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり
 - ウ 次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。
 - (ア) 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能
 - (イ) 創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能

〔共通事項〕で扱う「音楽を形づくっている要素」に関する本題材における学習内容

音色	感情やイメージによって変化する声の音色	ミュージカルならではの発声による声の音色
旋律	歌い手の表現によって音程やリズムの変化する旋律	

7 題材構想 (全7時間)

- (1) 声の音色の違いによって生まれるミュージカルの豊かな表現を味わおう (1時間)
- (2) 「嘘の仮面」と出会い、楽曲についてのイメージを膨らませよう (1時間)
- (3) ミュージカルらしく歌うために大切になってくることを共有しよう (1時間)
- (4) 「しゃべること」と「歌うこと」の境界線を取っ払おう (1時間)
- (5) ミュージカルならではの歌唱表現を追求し、歌唱披露のように歌い上げよう (3時間:本時はその3)

(1) 声の音色の違いによって生まれるミュージカルの豊かな表現を味わおう (1時間)

授業者は、子どもたちに新しい題材に入ることを伝え、黒板に「自由だ」と書きます。そして、子どもたちの方へ向き直り、突然、遠くまで響く、少し野太い声で「自由だ」と叫びます。授業者が突然叫びだしたことに子どもたちは驚くでしょうが、中には、授業者が以前ミュージカル『ジキル&ハイド』の話をしたことを思い出し、その物語のあらすじについて思い出そうとする子どももいるでしょう。

その後、授業者は少し間をおいてから、自分に言い聞かせるように、かみしめる声で「自由だ」と言葉を発します。さらに、少し間をおいてから、地をはうかのような、邪悪で静かなうなり声で「自由だ」と言葉を発します。

「自由だ」という言葉を3パターンで表現した授業者は、子どもたちに、それぞれの「自由だ」から「どのような印象を受けたか」「どのような感情がこもっていると感じたか」について尋ねます。それぞれの「自由だ」を比較した子どもたちは、同じ言葉でも感じ取ることでできる印象や湧いてくるイメージが全く異なることに気づき、思ったことを口々に発言するでしょう。なお、「もう一回聞かせてほしい」という要望には応じるようにします。

【遠くまで響く、少し野太い声】

- ・切り立った崖の上から壮大な景色を眺めて、のびのびと叫んでいるかのようだ
- ・勝ち誇ったかのようで、「自由」を手に入れて全身からエネルギーが湧き出ている感じがする
- ・「やったー」という感情が解放されているようだが、どこことなく邪悪な感じがするようにも思えた

【自分に言い聞かせるように、かみしめる声】

- ・「自由」を手に入れることをこれまでずっと切望してきた感じで、苦難を乗り越えてようやく手に入れた「自由」だと思った
- ・感情がこみ上げてきて、身体が震えている感じだ

【地をはうかのような、邪悪で静かなうなり声】

- ・静かなる邪悪なオーラをまとっている感じで、近寄ってはいけない存在というように思えた

- ・恨みや憎しみがこもっている感じで、復しゅうを始めそうだ

など

授業者は子どもたちの意見を板書し、声色によって「伝わってくる感情」や「想起されるシチュエーション」が異なることを確認します。また、「自由だ」が、ミュージカル『ジキル&ハイド』の中に出てくる台詞であることを伝え、子どもたちにプリントを配付し、次のことを共有します。

- ・ミュージカルとは、「音楽と芝居の融合した、誰にでも楽しめる演劇」であると言うことができ、ミュージカルには物語性があること
- ・ミュージカルは、上演される国の言語で歌われ、演じられること
- ・ミュージカル『ジキル&ハイド』のあらすじと、これまでの日本での上演歴

ミュージカル『ジキル&ハイド』のあらすじを読んだ子どもたちは、「自由だ」という台詞が、ハイドがジキルから分離して、物語で初めて登場する際に発するものであることを確認するでしょう。そして授業者は、一番始めに表現した「自由だ」は、石丸幹二が演じるハイドを参考にして、これまで「善」に止められて表に出てくることのできなかつた「悪」が、「ようやく解放されたぞ!」と叫んでいるシチュエーションをイメージして表現したことを伝えます。また、三番目に表現した「自由だ」は、1997年にブロードウェイで公演された際の歌唱を録音したCD(ロバート・クッチオーリ主演)を参考にして、邪悪さを全面に押し出そうとしたことを伝えます。そして、子どもたちがミュージカルについてイメージをもつことができるように、ミュージカル『ジキル&ハイド』2018年公演PV【舞台映像 Ver.】(<https://www.youtube.com/watch?v=FzT86mItZs8>)を紹介し、

その後、授業者は子どもたちに、石丸幹二の「自由だ」とロバート・クッチオーリの「自由だ(Free)」に限らず、歌唱表現でも声色の違いが表れていることを伝えます。そして、ジキルの中の「善」と「悪」を分離し、ハイドという別人格を生み出すことにな

る薬を飲む直前に、ジキルがこのミュージカルで最も有名だと思われる楽曲「時が来た」を歌うことを紹介し、鹿賀丈史と石丸幹二の「時が来た」の歌唱を聴き比べることを提案します。子どもたちは、同じ「時が来た」でも、歌い手によって歌声や歌唱表現が全く異なることにおもしろさを見だし、気づいたことや感じ取ったことを発言するでしょう。

- ・鹿賀丈史の歌声は渋くて深く、少し鼻にかかった感じがする。それに対して、石丸幹二の歌声はのびやかで張りがあり、ストレートな感じがする
- ・鹿賀丈史の歌う「時が来た」は歌い出しから決意が固い感じがする。石丸幹二の歌う「時が来た」は「ようやくここにたどり着いた」とかみしめながら歌い始めている感じがする
- ・鹿賀丈史と石丸幹二で、リズムが随分違っているところが多々あった
- ・鹿賀丈史は、石丸幹二に比べてヴィブラートをたくさん部分でかけている。石丸幹二は、旋律をあえて高くして歌っているところがある
- ・鹿賀丈史が歌う方は、石丸幹二が歌うものに比べてテンポが速く、駆け抜けていくようだった。石丸幹二が歌う方は、鹿賀丈史が歌うものに比べて声色の変化に富み、より表情豊かだった

など

子どもたちは、第1時の活動を通して、「感情やイメージによって変化する声色」や「歌い手の表現によって音程やリズムの変化する旋律」におもしろさや豊かさを見いだしたり、「ミュージカルならではの発声」による歌唱に圧倒させられたりするでしょう。そして、「歌い手なりに感情やイメージについての思いを豊かに膨らませて、個性を発揮しながら表現すること」のよさを感じ取るでしょう。授業者は子どもたちに、これからの授業でミュージカル『ジキル&ハイド』の楽曲を扱い、音楽と芝居の融合したミュージカルならではの歌唱表現に挑戦していくことを伝え、第1時を終えます。

第1時を終えた子どもたちの「追求の記録」には、次のような記述が見られるでしょう。

- ・同じ言葉でも、感情やシチュエーションによって声色が変化することに気づいた
- ・私たちがいる言葉を声色の変化を伴って発すると、その言葉には「その言葉自体のもつ意味」以外にも他の意味合いが付け加わり、その言葉が生きたものになるのだと思った
- ・声色の変化による感情表現の豊かさに改めて気づくことができた。歌唱表現にかしたい
- ・生まれもった声は人それぞれ違い、声にはその人の個性が詰まっていると思った

- ・同じ曲でも、鹿賀丈史の歌う「時が来た」と石丸幹二の歌う「時が来た」では印象が異なり、とてもおもしろかった。私も自分らしさを発揮しながら歌うことができるようになりたい

など

(2) 「嘘の仮面」と出会い、楽曲についてのイメージを膨らませよう (1時間)

授業者は、前時の「追求の記録」に記入された内容をいくつか子どもたちに紹介した後、子どもたちにミュージカル『ジキル&ハイド』の物語がどのように幕を開けるのかを紹介し、紹介する際には、ミュージカル『ジキル&ハイド』2016年公演版キャストハイライト・ライブ録音版CDに収録されている最初の3トラック(1 プロローグ/2 闇の中で/3 嘘の仮面)を再生します。台詞や歌詞の書かれたプリントを見ながら音源を聴いた子どもたちからは、次のような感想が聞かれるでしょう。

- ・音源を聴いただけでも、これから始まる物語に対する期待感が高まり、ドキドキしてしまった
- ・「プロローグ」は、歌こそないが、重低音がドーンと鳴り響く壮大な始まり方によって、一気に物語に引き込まれてしまった。また、石丸幹二の勇ましい声でのナレーションが、これから始まる物語で起こる悪いことを予感させているようで、心をぐっとつかまれてしまった
- ・「闇の中で」は少しうつろな感じの声で歌われているけれど、「約束します 見捨てません」という歌詞を歌う部分からは、意志の強さを感じた
- ・「嘘の仮面」は、大勢の人が交互にソロを担当しながら歌い合わせていて、とてもかっこいい。演じるかのように歌っていて、表現力がすごい

など

その後、授業者は子どもたちに、アンサンブルキャストによって歌われる「嘘の仮面」の歌唱に取り組むことを伝えます。そして、もう一度「嘘の仮面」を鑑賞する機会を設け、印象に残った歌詞や歌い手の表現、そして楽曲の音楽的な特徴などについて、気づいたことや感じ取ったことを子どもたちと共有します。

- ・「裏の顔は表に出さない 人は 裏切るものだわ」という歌詞が、警戒心むき出しな感じで歌われていて、「どうせ裏切られてしまうのだ」という投げやりな諦めという印象を受けた
- ・「人は誰も持つさ 裏表を」という歌詞が、人間の本質をついているようで興味深い。歌い方も、まるで「本心を見抜いてやるぞ」というかのよう

にあやしむ感じの声で、クレシェンドをかけている

- ・「牧師なのに人を殺し 教師なのに人だましていいか」という歌詞が、とにかく強烈だ。言葉を吐き捨てるかのように「いいか」と歌っている
- ・「人はふたつ そうさ善悪 良い行い 邪魔されるぞ!」という歌詞にどきっとさせられた。歌い手全員で歌われていることもあり、余計にはっとさせられる
- ・最後の「すべて仮面」の消え入るような表現が気に入った
- ・似たような旋律が何度も繰り返されているが、歌詞の内容がおもしろく、歌い手一人一人の個性が発揮されているため、聴いていて飽きない

など

その後、授業者は子どもたちに楽譜を配付し、今度は楽譜を見ながら「嘘の仮面」を聴くよう促します。共有された意見を確かめながら聴くことで、子どもたちはアンサンブルキャストの歌唱表現における「感情やイメージによって変化する声の音色」を敏感に感じ取り、気づきを広げていくでしょう。

いくつかのパターンの旋律が繰り返されていくことで楽曲になっていること知覚し、楽曲の全体像を捉えつつある子どもたちは、次第に「嘘の仮面」を歌いたくなくなるでしょう。そこで、楽曲を細かく区切り、授業者の範唱を聴きながら、音とりを進めていきます。子どもたちにとって、音域的に無理が生じそうなところもありますが、授業者はそのようなところは音程を変化させてよいことを伝え、むしろ多少アレンジして個性を出した方がミュージカルらしくなると声をかけて、子どもたちを励ましていきます。

音とりを終えたところで、授業者は、2018年1月に製作発表記者会見にて歌唱披露された「嘘の仮面」(https://www.youtube.com/watch?v=v0Ry3_9CKfU)を子どもたちに紹介します。子どもたちは、役になり切って歌唱披露するアンサンブルキャストの映像を食い入るように視聴することでしょう。そこで授業者は、この題材では最終的に「嘘の仮面」を視聴した歌唱披露のように歌い上げていくことを子どもたちに提案して、第2時を終わります。

第2時を終えた子どもたちの「追求の記録」には、次のような記述が見られるでしょう。

- ・「嘘の仮面」は曲調がかっこよくて、歌詞も奥深いため気に入った。早く全部しっかりと歌うことができるようになりたい
- ・「牧師なのに人を殺し 教師なのに人だましていいか」という歌詞を特に気に入った。この部分は日頃の鬱憤を晴らすかのように歌いたい

・「嘘の仮面」が、これから始まる物語のテーマを予感させ、観衆を作品の世界にいざなう楽曲だということがわかった。物語の世界の住人になり切って歌っていききたい

・「嘘の仮面」も、楽曲の中で声色が変化していた。歌詞の内容を自分なりに解釈し、それぞれの歌詞にどのような感情を乗せて、どのような声色で発していくか、追求していききたい

・「嘘の仮面」は、同じ旋律が繰り返されている楽曲だから、案外覚えやすいと思った。旋律をアレンジしてもよいとのことだったので、自分らしくのびのびと歌えそうで楽しみだ

・授業の最後に視聴した歌唱披露の映像では、歌い手が鬼気迫る表情で、身振り手振りもつけて歌っていた。きっと役に入り込んでいたからだろう。人物像のイメージを膨らませて歌っていききたい

など

(3) ミュージカルらしい歌唱表現にしていくために大切になってくることを共有しよう (1時間)

CDの音源を聴いた後、全員で「嘘の仮面」を通して歌唱します。子どもたちが旋律のイメージをつかみ切れていないところがあったら、授業者はその部分を取り出して、丁寧に確認していきます。

その後、授業者は「どのようにしたら音楽と芝居の融合したミュージカルらしい歌唱表現になるだろうか」と子どもたちに投げかけます。製作記者会見で披露された「嘘の仮面」を視聴する時間もとりながら意見交換をする中で、子どもたちは次のような発言をするでしょう。

・恥ずかしがらずに、堂々と歌うこと。そのためには、自信をもって歌うことができるようにしっかりと練習したい

・明確な人物像のないアンサンブルキャストであったとしても、物語の世界に入り込んで、登場人物になり切って歌うこと。そのために、物語の世界について自分なりにイメージを膨らませていきたい

・お腹を張って、声を十分に出して歌うこと。声が届かなければ、何も始まらない

・歌詞の内容を自分なりに解釈して、感情を込めて歌うこと

・ただ歌うことだけに必死になるという状態からは脱却し、表現するという意思をもって歌うこと

・感情やイメージに対する思いを、漠然としたものからできるだけ具体的なものへと膨らませることが大切だ。そのことが、物語の世界に入り込んだり、登場人物になり切ったりして歌うことにつながる

- ・顔の表情や動作も大切だ。無表情だったり直立不動だったりする登場人物はいない。演じるとはそういうことだ
- ・感情やイメージを表現するために、歌声でも演じるし、顔でも演じるし、身体でも演じる。自分の殻を破ることが大切だ
- ・ミュージカルにおいて歌うという行為は、演技をすることの延長にある行為だ。だから、演じるように歌いたい
- ・やはり、CDや記者会見で歌われている映像を何度も見たり聴いたりして、真似をすることが近道だと思う。お手本に近づくことが大切だ
- ・目線や立ち方、姿勢も大事だと思った。目線は遠くへ送る。立っている姿勢は見栄えよく。ソロになる人は、自分が歌う時に一歩前へ出る。また、ソロの場面で歌っていない人は、ソロの人がそばにいたらその人へ目線を送る
- ・歌いながら思わず拳をにぎりしめていたり、両手を広げたりしている。そういった身振り手振りからも、感情がこもっていることが伺える

など

授業者は、今後の授業の課題を明確にするために、子どもたちの発言を分類しながら板書します。子どもたちの発言は、概ね「発声の根本に関すること」「恥じらいを捨てて大胆になること」「物語に入り込み、感情を声色の変化に乗せて表現すること」「表情や身振り手振りに関すること」に分類できそうです。意見共有後は、出てきた意見を意識しながら全員で「嘘の仮面」を歌唱する時間を設けます。そして、次回の授業では「発声の根本に関すること」を重点的に扱うことを子どもたちに伝えて、第3時を終わります。

第3時を終えた子どもたちの「追求の記録」には、次のような記述が見られるでしょう。

- ・「嘘の仮面」を歌い始めて2時間目だが、けっこう歌うことができるようになってきた。しかし、今はただ歌うことに必死な状態だ。今後はソロもやることになると思うので、一回一回の歌唱を大切にしたい、自信をつけていきたい
- ・「声色を変化させること」や「役になり切ること」を意識する前に、「まずはお腹から声を十分に出さなければ始まらない」という意見に、大いに共感した。自分は普段、口先だけで歌ってしまうことが多く、声を遠くまで届けることができない。今回は発声について重点的に高めていくとのことだったから、頑張りたい
- ・ミュージカルでは、声色や表情を変化させたり、身振り手振りをつけたりすることによる感情表現がとても大切になってくる。「嘘の仮面」では、

他人に疑いの目を向けたり、人間の二面性をあざ笑ったりしているから、歌いながら感情表現するうえで、けっこうエネルギーが必要になってくるだろう。それでも、歌唱表現で感情表現をすることを高めていくことが楽しみだ

- ・映像を見ると、ほんの少しの動作や目線の送り方も演技に入るのだということに気づいた。物語の世界に入り込み、登場人物になり切って歌うというのは、そういうことなのだろう

など

(4) 「しゃべること」と「歌うこと」の境界線を取っ払おう (1時間)

前回の授業で共有された意見を確認した後、製作記者会見で披露された「嘘の仮面」を視聴し、全員で「嘘の仮面」を歌います。その後、授業者は予告通りこの時間は発声について見直すことを子どもたちと確認し、「ミュージカルにおける発声で大切になってきそうなことは何だろう」と尋ねます。「お腹」や「横隔膜」といった身体の使い方に関する発言が出てきたところで、授業者は次の内容の書かれたプリントを子どもたちに配付します。

- ・ミュージカルでは、「しゃべること」と「歌うこと」が別物であるという認識を取っ払い、「しゃべるように歌うこと」が大切であること
- ・英語やイタリア語を話すネイティブスピーカーは「しゃべる」発声そのものが横隔膜呼吸になっていることが多いが、日本語には極少量の息でも言葉を発することでできてしまうという特性があるため、日本人の中には日常的に横隔膜呼吸を用いて「しゃべる」ことをあまりしていない人も見られること
- ・意識的に横隔膜呼吸を用いて「しゃべること」が「歌は語るように、台詞は歌うように」を実現できること

プリントに目を通した子どもたちに、授業者は「しゃべるときと歌うときでは発声が違うか」と尋ねます。子どもたちは、普段の発声を見直したり、横隔膜呼吸を用いて言葉を発する状況について考えたりするでしょう。また、「横隔膜呼吸を用いて言葉を発するのはどのようなときだろうか」と尋ねると、様々な回答が返ってくるでしょう。

- ・遠くに向かって「ヤッホー」と呼びかけるとき
- ・先生が、物を投げている人を見て怒るとき
- ・ハイドが「自由だ」と叫ぶとき

など

子どもたちが挙げたいいくつかシチュエーションを採用して、授業者と子どもたちで、それぞれを再現してみます。子どもたちは、横隔膜呼吸を用いてしゃべるといことが、怒鳴ることのできる声でしゃべることであり、演劇や朗読のようにしっかりと息を吐いて言葉を発することであることを確認していくでしょう。

その後、授業者はミュージカル『ジキル&ハイド』に出てくる台詞や「嘘の仮面」の歌詞を、横隔膜呼吸を用いてしゃべること（音読すること）を提案します。なお、用意する台詞は次の通りで、「プロローグ」でジキルによって語られるものとします。

我々は、誰もが二つの顔をもっている。もし、この「善」「悪」という、本来人間のもっている二面性の分離が可能であれば、我々はあらゆる苦しみから解放されるだろう。この二つの相反する人格が常に争いを繰り返すことから、人間の災いは始まったのだ……。

子どもたちが横隔膜呼吸を用いてしゃべることに慣れてきたら、授業者は声色の変化をつけることも意識するよう声をかけていきます。また、「嘘の仮面」については、横隔膜呼吸を用いた発声をキープしたまま、歌詞の音読と歌唱をフレーズごとに交互に行ったり、ミュージカルにおいては横隔膜呼吸を用いていれば地声を使って歌ってもよいことを伝えたりして、子どもたちにかかわっていきます。さらに、身振り手振りをつけながら朗読したり、表情をつけて歌ったりすることについての声かけもしていきます。

第4時の終わりには、横隔膜呼吸を意識しながら全員で「嘘の仮面」を通して歌い合わせることとします。「しゃべること」と「歌うこと」が別物だという認識を取り払うきっかけを子どもたちが得ることができていたら、この段階での子どもたちの歌唱は、随分とミュージカルらしいものになってきていることでしょう。

第4時を終えた子どもたちの「追求の記録」には、次のような記述が見られるでしょう。

- ・歌うときの発声と朗読するときの発声が結びついたとき、「しゃべるように歌うこと」がどういことかピンときた。「プロローグ」の台詞については、声色を自分なりに変化させながら表情豊かに朗読することができたという手応えを感じている。「嘘の仮面」も、声色を変化させながら表情豊かに歌うことができそうな気がしてきた
- ・これまでではきれいに響く声で歌うことばかり意識してきたけれど、ミュージカルでは横隔膜呼吸を使っていれば地声をどんどん使ってよいと聞いて

て、自分の中で天と地がひっくり返った。声帯への負荷は気にしつつも、個性を發揮しながら歌っていききたい

- ・朗読と歌を交互にすることで、音域が高いところも楽に歌えるようになった気がする。横隔膜をこれだけたくさん使ったのは、今日が初めてかもしれない。横隔膜呼吸を用いて歌うことを自分のものにできれば、どんどん音域を広げることができるかもしれない
 - ・演じるように歌うことが楽しいと思えた。次回からの授業は歌唱披露に向けたグループ練習に入っていくが、今日のこの大胆さを忘れずに、エネルギーギッシュに楽しみながら活動していきたい
- など

(5) ミュージカルならではの歌唱表現を追求し、歌唱披露のように歌い上げよう

(3時間：本時はその3)

第5時では、全員で歌詞の朗読をしてから「嘘の仮面」を歌い合わせた後、授業者は子どもたちに3時間かけてグループで歌唱披露のように歌い上げていくことを伝えます。また、最終時には互いの歌唱披露を鑑賞することも確認します。そして、歌唱披露のように歌い上げていく際の条件を子どもたちに提示します。(条件は必要に応じて変更される可能性あり)

【歌唱披露のように歌い上げていく際の条件】

- ・歌唱披露の映像で独唱されている箇所については、一人または二人で歌うこととし、全員が最低一箇所は一人または二人で歌う部分を担当すること
- ・歌唱披露の際は、スピーカーから流れる音源に乗って歌うこと
- ・歌唱披露の際は、原則的に全員が横一列に並んで歌うこととし、列の並び順を歌いながら変えないこと
- ・歌唱披露では、一步前に出たり、一步後に下がったりするなどといった動きはよいが、ステップを踏んだり踊ったりしないこと
- ・歌唱披露の際は、身振り手振りという域に収まらない振り付けはしないこと

条件の確認後、「どのような感情を声色の変化にのせて表現しているか」や「どのように身振り手振りをつけているか」についてアンサンブルキャストの歌唱表現から参考にできるように、製作記者会見で披露された「嘘の仮面」を全員で視聴する時間を設けます。なお、視聴する前には、アンサンブルキャストがどのように並んでいて、どの独唱パートをどのキャストが担当しているかについて、子どもた

ちと確認します。また、視聴後に、「どのキャスト」が「どの部分の歌詞」を歌っているときの「声色」「歌い方」「表情」「身振り手振り」に魅力を感じたかについて話題にすることを子どもたちに伝えます。「声色」「歌い方」「表情」「身振り手振り」に注目しながら視聴した子どもたちは、『このキャスト』の『この表現』を真似したいから、自分も『この部分』を独唱したい」といったような思いをもつことでしょう。

- ・「東の間の」と歌っている人が、その部分に限らず歌っているときの表情が様々に変化していて魅力的だ。呆れているような顔、憎しみのこもったような顔など、表情を参考にしたい
- ・「ほんとうのことただ一つさ」と歌っている人が、手を横に広げてから力強く拳をにぎっている。そういう身振り手振りもかっこいい。また、「この世は辛い日々さ」の少し小馬鹿にした感じで嘆いているような声が好きだ
- ・「裏の顔は表に出さない人は裏切るものだわ」と歌っている女の人の表情のひょう変ぶりが怖いけど、それぐらい入り込んで歌いたい
- ・歌い出しでうなるような声で「人前ではお付き合いの」と歌っていた男の人が、独唱箇所ではないが「会う人誰もあんたもあんたも」のところで、左右に指を差しながら歌っている演技が役になり切っている感じがいい。ぜひ取り入れてみたい
- ・男の人の中にも、女の人の中にも「世間と向き合う」を1オクターヴ上で歌っている人がいる。この部分こそ聴き手にインパクトを与えるために女声は悲鳴のように裏声を使うところだろう
など

その後、授業者は子どもたちとミュージカルならではの歌唱表現を追求していくための四つの視点「しゃべるように歌うこと（横隔膜呼吸）」「恥じらいを捨てて大胆になること」「物語に入り込み、感情やイメージを声色に乗せて表現すること」「表情や身振り手振りをつけて表現すること」をもう一度確認し、グループ活動に移るよう促します。

グループ活動では、一つのグループは音楽室で、もう一つのグループは社会科教室で活動します。また、それぞれの部屋に、子どもたちがミュージカルならではの歌唱表現を追求していくことができるように、授業者は以下のものを自由に使用できるようにして、練習環境を整えます。

電子オルガン 鏡 オーディオ スピーカー
 拡大した歌詞 歌唱入り音源 伴奏音源
 iPad と TV（製作記者会見の歌唱披露視聴用として）

グループ活動では、子どもたちはまず独唱パートの分担を始めたり、立ち位置を決めたりするでしょう。取りあえずみんなで伴奏音源に合わせて歌ったり、製作記者会見の歌唱披露を視聴したりするグループもあるかもしれません。歌詞の朗読から始める子どももいるかもしれません。子どもたちは役割分担をし、思い思いに練習を始めていくでしょう。

授業者は、第5時の終わりにはどちらのグループも現時点での歌唱披露を録画します。そして、子どもたちが次時のグループ活動の中で客観的に視聴して、成果と課題を自分たちで分析できるようにします。その後、次回の授業ではリハーサルを兼ねた中間発表を行うことを子どもたちに提案して第5時を終えます。

第5時を終えた子どもたちの「追求の記録」には、次のような記述が見られるでしょう。

- ・グループ活動が始まり、自分の独唱部分が決まったので、音源を参考にしながら自分らしく歌いたい。また、グループ全員で歌う部分も、表現をみんなで相談して決めていきたい
- ・表情をつけたり、身振り手振りをつけたりしようとすると、照れてへらへらしてしまう。しかし、照れてへらへらしてしまうと、『ジキル&ハイド』の世界に聴き手をいざなえないから、殻を破るしかない。楽しく頑張りたい
- ・自分はまだ「しゃべるように歌うこと（横隔膜呼吸）」「恥じらいを捨てて大胆になること」「物語に入り込み、感情やイメージを声色に乗せて表現すること」「表情や身振り手振りをつけて表現すること」のどれも中途半端だ。グループの仲間とアドバイスをし合って表現を磨きたい
など

第6時は、リハーサルを兼ねた中間発表に向けて、グループ活動から始めます。グループ活動では、子どもたちは最初に前回の授業で録画したものを視聴し、成果と課題を分析するでしょう。そして、「しゃべるように歌うこと（横隔膜呼吸）」「恥じらいを捨てて大胆になること」「物語に入り込み、感情やイメージを声色に乗せて表現すること」「表情や身振り手振りをつけて表現すること」を意識しながら練習に取りかかることでしょう。授業者は子どもたちの思いを引き出しながら、一緒に歌ったり、時には練習の仕方を提案したりして、子どもたちが自信をつけることができるように、適宜アドバイスをしとかかわっていきます。そして、子どもたちがいきいきと活動することのできる雰囲気づくりを大切にしたいと思います。

授業の後半は、リハーサルを兼ねた中間発表を行います。子どもたちは、初めて観衆を前にして「嘘

の仮面」を披露することとなりますが、ここでの経験から、歌唱をさらに磨き上げていくための多くの気づきを得ることでしょう。

リハーサルを兼ねた中間発表後には、再びグループ活動の時間を設け、録画したものを視聴します。そして、「しゃべるように歌うこと（横隔膜呼吸）」「恥じらいを捨てて大胆になること」「物語に入り込み、感情やイメージを声色に乗せて表現すること」「表情や身振り手振りをつけて表現すること」の視点から、「個人の成果と課題」と「グループ全体での成果と課題」を分析するように促して、第6時を終えます。

第6時を終えた子どもたちの「追求の記録」には、次のような記述が見られるでしょう。

- ・授業の最初にみんなで歌い合わせるときには、十分に声を出して歌うことができるが、一人で歌うとなると、大胆になることができないところが自分の課題だ。家でも練習したい
- ・自分に自信をもって、堂々と表現することがいかに大切かを痛感した。しかし、みんなの前で堂々と表現することは楽しいとも思えた。役になり切ることを楽しむことができれば、聴き手をひきつける歌になると思うから、本番も楽しみながら頑張りたい
- ・個人で歌う部分を役になり切って声色や表情の変化をつけて歌うことができている人もいて、すごいと思った。逆に、緊張をごまかすかのようにいい加減に歌っている人を見ると、見ている方まで恥ずかしくなってしまう。緊張はすると思うけれど、それを受け入れて、精一杯自分らしく取り組むことが大切だ
- ・役になり切って歌っていたが、途中で我に返って吹き出してしまった。これは絶対にやってはいけないことだ。最後の最後まで役になり切って、演じるかのように歌いたい
- ・全員で歌う部分の声色の変化もこだわっていききたい。次回は、全員で歌う部分を取り出して練習する時間を十分に確保したい

など

第7時では、授業者が子どもたちの「追求の記録」の記述をいくつか紹介した後、横隔膜呼吸を意識しながら「嘘の仮面」の歌詞を全員で朗読し、その後「嘘の仮面」を歌い合わせます。そして、子どもたちはグループに分かれて、歌唱披露に向けて最後の練習に取りかかっています。

グループ活動の始めには、前時に行った「歌唱披露」のリハーサルを兼ねた中間発表から得られた課題を克服しようと、子どもたちは練習を重ねていくでしょう。授業者は、ここでも子どもたちの思いが

実際の歌唱表現に結びつくように、一緒に歌ったり、時には練習の仕方を提案したりして、子どもたちが自信をつけることができるようにかかわっていきます。

- ・遠くを見つめながら顔を上げて歌うことができるようになってきた。さらに表情の変化をつけることができるように、鏡を見ながら練習しよう
- ・それぞれの独唱の部分を、一人一人がどのような声色で、どのような表情で、どのような身振り手振りをつけて、どのような心情を表現するのか、共有しながら歌おう
- ・「日が暮れば 一人になり 素顔見せる 誰もそうさ！」のところは、全員が言葉のまとまりごとに区切って鋭く歌うようにして、恐怖が迫り来るかのように歌おう。横隔膜を下げて、息をたくさん使って歌おう
- ・最後の「終わりが無い」「だまされるな」「表向きで」「裏があるぞ」は、もっと切羽詰まった感じを出せるように、ヴィブラートをかけながら歌いたい。最後の部分を取り出して練習しよう
- ・歌の締めくくりに、声をひそめて虚しい感じで歌う「すべて仮面」の「仮面」は、横隔膜を下げ続けることを意識して、息をおでこに当てるように歌わないと、響かなくなってしまう。まだうまく表現できていないから、練習しよう

など

グループ活動後、「嘘の仮面」の歌唱披露を聴き合う時間（本番）を設けます。前回のリハーサルでの課題を克服しようと練習をしてきた子どもたちは、アンサンブルキャストになり切って、「嘘の仮面」の世界に入り込み、声色や表情を変化させ、身振り手振りをつけながら自分らしくいきいきと歌唱することでしょう。

授業の最後には、子どもたちに題材を通しての感想を尋ねます。そして、授業者は子どもたちに、『ミュージカルらしい歌唱表現を追求する中で、「歌詞で表現されている感情の変化についてイメージを十分に膨らませ、自分自身の声で声色を様々に変化させながら表現することのおもしろさを感じること』『他者の歌声と調和させることのできる歌声で歌唱すること』や『音程をはずさずに正確に歌うこと』ばかりを意識するのではなく、表現することに大胆になって、いきいきと歌唱表現すること』を題材に込めた願いとして伝えます。そして、子どもたちと共に、互いの歌唱披露を賞賛し合い、本題材を閉じることにします。

授業者は、子どもたちに題材を通しての感想を記述するよう促します。そこでは、次のような記述が見られるでしょう。

- ・一人一人が個性を發揮しながら、のびのび歌唱する姿がグループ活動や他のグループの歌唱披露で見ることができた。クラスの一人一人が個性を發揮している姿がとてうれしかった
- ・表現するためには、何よりも技能を欠かすことはできないが、それと同じくらいイメージすることが大切であると気づくことができた
- ・もちろん製作記者会見の動画は参考にしたが、アンサンブルキャストの場合は細かい設定がないと思うので、自分なりの登場人物像を思い描き、自分なりのイメージになり切って表現するように心がけた。演じるように歌うことは初めての経験だったが、楽しかった
- ・合唱は、ユニゾンをみんなでぴたりとそろえたり、互いの歌声を聴き合って溶け合わせるようにしてハーモニーを生み出したりするから、調和することを大切にしたい音楽だ。しかし、ミュージカルは、歌い手が個性を發揮し、エネルギーに感情を解き放って表現することで形になる音楽だ。ミュージカルというジャンルにふれることで、新しい音楽のあり方に出会うことができて楽しかった
- ・これから合唱を歌うときにも、もっと歌詞の内容や楽曲の背景からイメージを膨らませて、表情豊かに歌っていきたいと思った。また、横隔膜呼吸は、他の種類の歌を歌うときにも重要だから、合唱でもお腹の支えを意識し続けて歌っていこうと思った
- ・声色の変化は目には見えないが、表情や身振り手振りといったような目に見える動作が影響しているように思えた
- ・「嘘の仮面」は全体的にいぶかしむ表現が多い曲だが、いぶかしむという感情表現も一様ではなく、「嘘の仮面」という楽曲の中だけでも物語のようなものがあって、演じるかのように歌ってこそ、よさを味わえる楽曲だと思った
- ・声色を変化させようとする、自然と表情を変えなくなったり、身振り手振りをつけなくなったりすると思った。どれも感情を表現するうえでは欠かせない行為で、密接にかかわり合っていることに気づくことができた

など